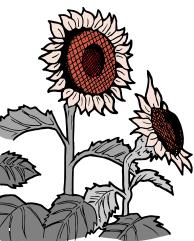


命の大切さを伝える「はるかのひまわり」

～阪神淡路大震災で被災した加藤いつかさんの講演会から～



10年前の1995年に起きた阪神淡路大震災で被災し、震災を通じて命の大切さを伝える活動を行っている加藤いつかさんの講演会が11月中旬、鷹巣小学校と鷹巣西小学校で行われ、児童、父兄らが加藤さんの語る被災体験とその後の前向きな取り組みなどに耳を傾けました。このうち、11月13日(日)に鷹巣小学校で行われた講演のようすをご紹介します。

世界中の被災地に植えられて いる「はるかのひまわり」

講演会は、地域住民に授業など日頃の学校活動を紹介する「みんなの登校日」に合わせて開催されたもので、同校PTA(北林丈正会長)の主催。同校の3年生から6年生までの児童のほか、参観した父兄や地域の皆さんおよそ300人が聴講しました。

「はるかのひまわり」は、震災で亡くされた加藤さんの妹・はるかさんの名前が付けられたひまわりの名称。震災後、はるかさんにちなんだこのひまわりの種が増やされ、命の大切さを伝え、また災害被災者などを元気づけるために、震災被害を受けた神戸市内、ニューヨークの同時多発テロの現場、また津波被害を受けたタイなど世界中の被災地などで植えられています。昨年から今年にかけて、テレビなどでも紹介されましたので、ご存知の方も多いかも

なった加藤さんの妹・はるかさんの名前が付けられたひまわりの名称。震災後、はるかさんにちんだこのひまわりの種が増やされ、命の大切さを伝え、また災害被災者などを元気づけるために、震災被害を受けた神戸市内、ニューヨークの同時多発テロの現場、また津波被害を受けたタイなど世界中の被災地などで植えられています。昨年から今年にかけて、テレビなどでも紹介されましたので、ご存知の方も多いかも

講師の加藤いつかさん。神戸市在住の26歳。15歳のとき阪神淡路大震災で被災。妹のはるかさんと家を失った。現在は、「1・17希望の灯り」というボランティアグループで被災体験を通じて命の大切さを伝えていく活動をしている。主な著書に「はるかのひまわり(ふきのとう書房)」他。



この日講演を聴いた鷹巣小学校の児童たちにも、加藤さんからたくさんの中種が贈られました。

しません。

この日講演を聴いた鷹巣小学校の児童たちにも、加藤さんからたくさんの中種が贈られました。

妹の遺体に付き添い、暮ら していた震災直後の生活

加藤さんは、地震が起きたときのようすを淡淡と話しあげました。「激しい揺れで家が倒壊し、2階から階下に降りようとする階段がない。1階に寝ているはずの家族に声をかけても返事がなく、近所の人たちの協力で数時間かけてようやく埋もれていた父母を助け出したが、家具の下敷きになつていた妹のはるかはすでに息がなかつた」遺体の安置場所になつた体育館で1週間ほど暮らし、妹の遺体にずっと付き合つていた。しばらくして、大きなトラックが体育館に横付けされたが、それは棺おけを組み立てるためのもの

で、出来上がつた棺おけに、収容されていた遺体が入れられ、次々と運ばれていたと当時の生々しい話を、児童たちは神妙な面持ちで聞いていました。

倒壊した自宅の跡地に咲 いたたくさんのひまわり

震災から1年がたち、加藤さん一家は避難所からマンションに移り住みますが、救出でもお世話になつた近所の方が、倒壊した加藤さんの家のあつた場所にたくさんのひまわりが咲いています。

鳥や動物を飼っていた近所の家から、鳥のエサにしていたひまわりの種がその場所に散らばつたのかもしれない」と加藤さんは話していましたが、この近所の方はひまわりを、はるかさんの生まれ変わりのように思い、被災者を元気付けようと空き地に種をまきます。増えたひまわりは、いつしか「はるか

のひまわり」と呼ばれるようになって市内に広く植えられ、その後世界中に輪が広がつた、との話に児童や父兄らも感銘を受けていたようでした。

妹の死によつてひきこもる ようになつた自分を克服

しかし加藤さんはその頃のことを、「妹の死を思うとともにつらく、通学途中の沿道に咲いているひまわりを見るのもいやでした」と、ひきこもるようになつた当時の自分を語ります。しかしその後、「ある活動家に会つたことなどをきっかけとして「1・17希望の灯り」というボランティア団体に所属し、はるかのひまわりの種まきに参加するようになつた」と話していました。

加藤さんは途中で子どもたちに、「地震が起きた時、非常用のリュックには何を入れますか」と問いかれます。水や食料、携帯電話や家族の写真、などと児童たちが答える用品などをボードに書きとめ、それについて、非常時を想定した使い方などについてアドバイスしていました。

また、「ひまわりの活動で一番強く印象に残つてることはなんですか」と児童の質問に加藤さんは、「何も言わずにともくもくと10年間もひまわりを育てくれた近所の人かな」と答え、児童らにも「植えたひまわりが大きくなつた当時の自分を語ります。しかし

なつたら、ぜひその絵を書いて送つてね」と依頼し、「はるかのひまわり」の輪が秋田でも広がることを期待していました。

講演後、児童を代表して花束を贈呈した中嶋日那子さん(6年)は、「お話を聞いて命の大切さなどを知りました。いただいたひまわりの種は大切に育てます。これからも活動をがんばってください」と、加藤さんに感謝の言葉を述べていました。

いざというときに備えて避難 場所や持ち出し品の確認を

北秋田市でもこれまで何度も大きな災害に見舞われています。昭和47年に

は米代川流域の大洪水(家屋浸水6540戸)、昭和58年にはマグニチュード7・7という秋田県では史上最大規模となつた日本海中部沖地震、そして県内で5人の死者を出した平成3年の台風19号と、甚大な被害をもたらした災害に襲われました。

突然の災害では、どういう事態が発生するか予測できません。これらの災害を振り返り、いざという時の避難場所や非常時の備えなどを確認しておきましょう。

次ページに、もしもの場合の避難場所などを記載していますので、家族みなさんで確認し合いましょう。



▲贈られた「はるかのひまわり」の種



▲実際に災害が起きた時の備えについて児童に問い合わせる加藤さん



▲講演を真剣に聞く鷹巣小学校の児童たち